

混ぜ物について理解する Part 1

ジェイムズ・ジェイコブ・プラッシュ

世の心理学が聖書の教理に成りすます時代には、物事が大変混乱してしまうことがあります。今日頻繁に耳にするのは、真理と誤りが、肉的なものと霊的なものが、良いものと悪いものが混じり合い、あるいは神のものと悪霊のものさえ混じり合っているという事です。さらに悪いことに、私たちは混じり合った信号を与えられていることがあまりにも多いのです。信号の意味が明確に示される代わりに、牧師やかつては尊敬されていた指導者たちの多くが、「信号は赤でも青でもない。黄色だ」というようなことを教えています。その結果、私たちは進むべきか止まるべきかわからずに、中間地点で一時停止をしたままなのです。このような時、正しく行動するために真理を知りたいと心から願っている多くの誠実な信者たちにとって、正しい聖書的立場に到達し、聖書的方法で物事を見定めることはますます難しくなってしまうのです。しかし、複雑化するこのような迷路に入り込んでいる時、第一にすべきことは、「神様は、混ぜ物について御言葉でどのように言われているか」と質問してみることです。

I テサロニケ 2：3～5 私たちの勧めは、誤りから出ているものでも、不純な心から出ているものでもなく、だましごとでもありません。むしろ私たちは、神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせるのではなく、私たちの心をお調べになる神に喜んでいただくとして語っているのです。あなたがたが知っているとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、貪りの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。

II ペテロ 2：1 しかし、御民の中には偽預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れます。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込むようになります。自分たちを買い取ってくださった主さえも否定し、自分たちの身に速やかな滅びを招くのです。

霊的誘惑の本質と、それが神の御言葉にどのように影響するかを理解する

テサロニケの手紙第1で、パウロは聖霊から与えられた直感により、真の使徒の説教は「誤り、不純な心、だましごと」ではないと教えています。どんな説教でも、教理的な誤りや不純物を含んでいるものは、神からのものではありません。またパウロが、聖霊に示されてこれら3つのことばを同列に並べているのは、それらが互いに派生し合うからです。教理的誤りは不純な心へと誘導し、不純な心がだましごとや悪知恵を生み出すのです。

それは、誤り（ギリシャ語のプラナス）から始まり、間違った教理と関係しています。聖書の教理とはイエス様の教えです。イエス様は、父が私たちを真理によって聖め別って下さるように祈られました。神の御言葉は真理です（ヨハネ17：17）。

ここで真理を表すために使われているギリシャ語はロゴス、ヘブル語のダバル（ことば）です。ご存知のように、イエス様ご自身がロゴス、受肉された御言葉（ヨハネ1：1）です。イエス様ご自身を“真理”と定義されたのはそのためです（ヨハネ14：6）。

もし聖書的な真理に立っていない人がいるなら、キリストの内に立っているのではなく、神に聖別されてもいません。

ですから終わりの時代において、教理的な真理を愛さない人々は、本当はイエス様を愛していないのだとわかります。その二つは、互いを測るバロメーターのようなものです。そのような不信者は、反キリストに簡単に奪われてしまうでしょう（実際その人々はすでに、神学者や哲学者がドイツ語でツァイトガイストと呼ぶ“時代の霊”、つまり反キリストの霊—Iヨハネ2：15～18—の影響下にいるのです）。けれどもこの聖書箇所によると、クリスチャンと公言し、「私たちの中から出て行った」滅びの子（ユダは反キリストを思わせる）のような人々もその中に含まれていることがわかります。考えるのも恐ろしいことですが、聖書的事実であることを好まない“クリスチャン”は、反キリストの到来後、パウロがアポスタシアと呼ぶ“大いなる背教”に陥ると明言されています（IIテサロニケ2：9～12）。この御言葉によると、真理を愛さない者はイエス様を本当は愛しておらず、不義を喜んでいることになります。

またそのような背教が起こるのは、実際、神の裁きによるのであり、それは神の御言葉を愛さず、それゆえ神の御子を愛していない人々が、神によって惑わしに引き渡されるからであると書かれています。さらに、それがどのように起こるかも教えられています。反キリストは、聖書の真理を愛さない人々に対する神の裁きの道具であり（ゼカリヤ11：12～16、滅びの子）、そのために偽のしるしと不思議を用います（黙示録13：14、IIテサロニケ2：9～11、マタイ24：24）。パロの魔術師のように、反キリストと偽預言者は悪霊の力を使ってしるしと不思議を行い、神の働きを模倣し、本物の聖霊の賜物が聖書的に用いられているように見せかけることでしょう（IIテモテ3：8）。それゆえ、イエス様は「悪い姦淫の時代はしるしを求める（ルカ11：29）」と警告されました。これも恐ろしいことです。これまで何度か指摘してきたように、もしベニー・ヒンやジョン・アーノットのような明らかな異端者を見抜けないなら、あるいはジェラルド・コーツやポール・ケインやリック・ジョイナーのような検証済みの偽預言者を見抜けないなら、あるいはモーリス・セルロのような拝金主義の誇大広告アーティストに追随するエリムのようなカルト化教会を見抜くことができないなら、やがて訪れる本物の欺きから逃れる道はありません。

聖書が警告するように、そのようなクリスチャンは、自分の信仰や行動が聖書的でないと示された時、そう指摘した人をパリサイ的であると非難することがあるでしょう。事実、そのような人々は非常に高慢無知で、自ら好んで盲目になっています。そして彼らは、新約聖書におけるパリサイ人とは、考え方と実践において聖書的な基礎が欠けていて、“人間の作り事を神の戒めのように教える”（**マタイ 15：9**）人々であることに気づいていません。神の言葉がパリサイ的と説明しているのは、まさに自分たちのことなのだというのに、彼らは気づかないのです。事実、聖書的に判断するなら、例えば、教会の信用を失わせるようなモーリス・セルロのふざけた態度を、非聖書的・非論理的にちやかして宣伝するエリムのトレンド・マガジンの責任者、ジョン・スミスのような人物、また、セルロと行動を共にするアッセンブリー・オブ・ゴッド教団のデイヴィッド・シアマンのような人物が、今日のパリサイ人と言えます。イギリスの広告基準協議会から、セルロの不適切な4つの基金の全部が追徴課税されたにもかかわらず、イギリスの主だったペンテコステ派が、まだセルロを支持しているのです。テレビ放映されたセルロの偽の癒しや聖職売買が暴かれ、その都度、福音同盟から「すべてが悪いわけではないが、混ぜ物がある」と言われてセルロが辞任を勧められているのに、そのようなリーダーたちは、セルロのような男をいつでも擁護し、プロモートし、宣伝し続けるのです。けれどもそのような混ぜ物について、主は何とされているのでしょうか？

イエス様は、混ぜ物に基づく偽りの教理と間違った実践のことを「パリサイ人のパン種（**マタイ 16：6、ルカ 12：1**）」と言われました。聖書の類型論では、パン種は霊的プライドと、そこから生じる罪を現します（**Iコリント 5：6～8**）。偽りの教理は罪であり、いつも霊的プライドを伴います。ですから“混ぜもの”について話す時、「**わずかなパン種が塊全体をふくらませる（Iコリント 5：6）**」ことを覚えておかなければなりません。パリサイ人が信じていたことの多くは、実は聖書的には正しかったのですが、偽りとは、民衆を主から引き離すもの全てを指します。

今日でもそれは同じです。超ペンテコステ派や過激なカリスマ派が教えることの多くは、本当のことかもしれません。レストレーションのようなカルト的ムーブメント、エリム、チャーチ・オブ・クライストで告白されている教理の大半は、大体において正しいでしょう。アルファ・コースで見られるものも、ほとんどは正しいです。けれども正しくないものが粉の塊全体をふくらませるのです。

私は、全ての忠実なクリスチャンと全ての忠実な教会が、いつでもあらゆる教理で同意できると言っているわけではありません。しかし、根本的な教理においては、あらゆる点で同意できると言うべきでしょう。たとえば、聖書の権威、福音、三位一体の神のご性質、クリスチャンの純潔などです。聖霊がイエス様を指し示すので（**ヨハネ 14章**）私たちはキリストを中心に礼拝するのですが、そうではなく、聖霊をベースにして霊中心の礼拝をしているの

を見る時、(アルファやベニー・ヒンの異端的書物に見るように)そこにパン種があることがわかります。御霊の実は自制(ガラテヤ5:23)なので、(エリム・マガジンのデイヴィッド・ブレイクの記事などで)酔っ払い現象や動物化現象が聖霊の現れとして推奨されている時、私たちにはそれが未知の霊であるとわかり、パン種を発見するのです。モーリス・セルロによって癒されたと宣言された子供が、悲惨にも間もなく死んでしまったのを見る時、また、セルロが借金をなくすために、聖霊の奇跡の布を24ポンドで販売し、エリムのジョン・スミスがそのセルロを宣伝し続けるのを見る時、そこにパン種が現れています。

イエス様は弟子を作るように言われましたが、改宗者を作れとは言われませんでした。聖書的な弟子訓練の第1歩はバプテスマです。アルファの主事、ニッキー・ガンベルが教えるように、「トロント体験に人々を連れて行くため、週末は不在」にしてはいけません。聖書は「キリストの血がすべての罪から聖める」と教えていますが、ローマ・カトリックでは、私たちは自分の罪を贖うために、煉獄と呼ばれる一時的な地獄で焼かれなければならないと教えられています。これは、避けるように命じられている異なる福音であり、このようなことを教える人々は神に呪われてしまいます(ガラテヤ1:8)。にもかかわらず、アルファではローマの教会に留まるように教えているのです。アルファ・コースの教えは、本当の麦に混ぜ込まれたパン種に基づいています。そのような“混ぜ物”を神様は、はっきりと呪っておられるのです。

ヘブライ人は麻と羊毛を混ぜて衣服を作ることを禁じられました。神様は混ぜ物を嫌っておられるのです(申命記22:11)。このように、“混ぜ物”は“誤り”にルーツがあります。聖書の聖さの基本は、正しい教理という真理です。そういうわけで、新約聖書では、正しい教理についての訓戒が、正しい行いに関する訓戒の2倍も記されているのです。もし正しい教理を持っていないなら、正しい行いもあり得ません。エキュメニカル教会の邪悪な実態の中に、ジョージ・カレイ、パット・ロバートソン、J.I.パッカー、キャンパス・クルセード・フォー・クライストのビル・ブライトのような人々を見るのです。

チャーチ・オブ・ザ・ナザレンのDr.ケントとチャック・コルソンは、「福音派とカトリックの一致」契約にサインして、ローマ・カトリック教がクリスチャンであると受け入れ、カトリックには伝道しないことに同意しました(ローマ・カトリックは異なる福音・偶像礼拝であり、ラテン・アメリカでは福音的クリスチャンを迫害さえしています)。批判されると、彼らは聖書の真理に反して妥協していることを言い訳して、「まあ、私たちはローマ・カトリック教会のすべてに同意しているわけではない。混じりけがあるので」と主張するのです。

さらに悲惨な例は、神学者のDr. ノーマン・ゲイスラーの不幸な立場にも見られます。(悲しいことにハンク・ハネグラーフは彼を偉大な弁証論学者と称賛しています。)ゲイスラーは福音的な学者と自称していますが、学問的背景はトーマス学説に傾いており、ローマ・

カトリック・ロヨラ大学（大量虐殺イエズス会騎士団の創設者ロヨラの名前にちなんだ）のトーマス・アクィナスの教えるアリストテレス神学の影響が基礎にあります。ゲイスラーは「ローマ・カトリック教会は、真理を含む偽教会なのではなく、偽りを含む真の教会なのだ」と公言しています。言い換えると、ゲイスラーは聖書的に弁解の余地のない“混ぜもの”を弁護しようとしているのです。この分野について、モリエルではロバート・ズインズの「背教の崖っぷち」という本をお勧めします。

間違った教理の結果、間違った行為が起こります。カトリック教徒は救われていると思いつまむように誘導されるので、人々はカトリック信者に伝道しなくなります。実際はほとんど救われておらず、救われているかもしれないカトリック教徒も、偶像礼拝を悔い改める代わりに、人肉食いのような忌むべき全質変化の秘跡（訳注：パンとぶどう酒が本当のキリストの肉と血に変化すると考えられている）を行い、死人に祈る黒魔術、マリアに対する異言の祈りという同じ罪を続けています。間違った教理は間違った行為をもたらします。

今日、サタンはトリニティ・ブロードキャスティングのポール・クラウチのようなエージェントを起こし、教理は分裂を引き起こすので重要ではないと教えさせています。彼らは、教理はイエス様の教えであるという事実を引き下ろしています。教理はイエス様の言葉であり、もし教理は重要でないと言うなら、聖書的に見て、イエス様は重要でないと言っていることになります。彼らはまた、神の言葉自体が、教理は分裂をもたらすものであると教えている（Iコリント11：19、ローマ16：17）ことを忘れていました。聖霊は真理の御霊であって誤りの霊ではないので、御霊の一致は異端のある所には存在しえないのです（Iヨハネ4：6）。そのようなだましごとを推し進める者たちは、いつも愛という名目を用います。彼らは、真理は躓かせるので、それは愛することではなく、分裂を引き起こす可能性がある、とねじ曲げた屁理屈を言います。しかしながら、神の御言葉は反対に、教理的に真の知識と識別力が豊かにならなければ、真の愛は豊かにならないことを教えています（ピリピ1：9）。イエス様もそのようにして、井戸端の女に愛を示しました。愛をもって、妥協せず、まっすぐに、女の偽りの宗教に対して真理を語ったのです（ヨハネ4：22）。ツロ・フェニキアの女にも同じようにされました（マルコ7：27）。女を愛されたので、真正面から、女の宗教は人間のものではなく、犬にふさわしいと言われたのです。ローマ・カトリック教もその程度のもので、私たちもイエス様ようになって、カトリック教徒にそう伝えられる程に彼らを受容しなければなりません。このパウロ書簡は混ぜ物について取り扱っています。主は私たちに、聖書的でない弟子たちを戒めるように命じておられます（Iテサロニケ5：14）。ジョン・アーノットは180度反対のことを教えました、神様は「すべてのことを見分け」、良いものを堅く守るように命じられました（Iテサロニケ5：21）。混ぜ物は決して良いものではなく、良いということがあり得ないのです。このように、教理的誤りが真理と誤りとの混ぜ物を生み出すことを見てきました。それはテサロニケ第1の手紙では“不純”と呼ばれるものであり、その結果、霊的だましごととに陥るのです。

I テサロニケの手紙にあるように、誤った教えが侵入することから生じる不純は、ギリシャ語で**アカタルシス**と言います。その反対のギリシャ語は**カタルシス**で、そこから英語の“カタルシス・浄化”と言う言葉が生まれました。アカタルシスという言葉は「罪が洗われていない」という意味の汚れを意味する単語ではありません。その意味を表すギリシャ語の単語は、全く異なる**アブソルシオ**という言葉です（“アブソリューション・免除”と言う単語はここから来ています）。また、アカタルシスは「悪いものを分離して良いものを残す」という意味でもありません。70人訳聖書では、エレミヤ15：19の「悪いものから良いものを取り出す」という意味のヘブライ語を、**エカガゲイス**という別のギリシャ語に訳しています。アカタルシスの意味する不純は、エカガゲイスの場合と異なり、洗って分離することのできない混合があることを示しています。カタルシスの場合は、何らかの清められたものが残ります。アカタルシスの場合は、純粋なものとは異なり、不純なものが混じりあっています。

その混ぜものは、表面にあって洗い流せるようなものではありません。均一に混じりあっているので、廃棄してそっくり取り換えてしまわなければならないものです。

このことは、ヘブライ語原語とギリシャ語テキストの両方から検証することができます。ヘブライ語でカタルシスに相当する単語は**タホレ**で、“きよい”を意味します。ダビデ王が悔い改めの詩編51篇で「神よ。私にきよい心を造り—レヴ・タホレ・ベラ・レ・エロヒム」と祈った時に使われています。それは、新たに生み出されなければならないものです。人間は墮落した存在なので、単に罪を洗い流せば良いというわけにはいきません。新しいものが生み出されなければならないのです（ヨハネ3：3）。きよく（タホレ）なるために、私たちの罪深い自己がイエス様と共に十字架に付けられ、イエス様と共に埋葬されなければなりません（ローマ6：3～6）。バプテスマは私たちの罪を洗い流すものではないとはっきり教えられています（I ペテロ3：21）。それは私たちの埋葬なのです（コロサイ2：12）。

私たちは神の御姿に似せて造られているのに、墮落した性質を持っているため、良いものと悪いものが混じり合った存在です。しかし神はきよさを求められます。主は、悪いものを洗い流して良いものを保つように、私たちをきよめるために悪いものを取り除こうとして時間を無駄使いされることはありません。あまりにも均質に混じりあっているのです——罪は私たちの全存在に及んでいます。ですから、水のバプテスマを受けるのは、本質的に、洗われるためではなく、埋葬されるためです。不純なものを洗ってきれいにしようとすることの虚しさは、パリサイ人に対するイエス様の比喻に示されています。パリサイ人は杯の外側を洗うが、内側は汚れた存在であるにもかかわらず（マタイ23：25）、アカタルシスを正すためにカタルシスしようとしたのです（実際の単語はカタリゾーという動詞形）。私たちは、クリスチャンとして自分自身をきよめることができます（II コリント7：1）が、それは日々十字架に戻り、キリストと共に死ぬことによります。良いものと悪いものを分離するのは

なく、混じり合った物を廃棄し、新しい被造物として生きることです。

「ライ病人のきよめ」というツアラートについての説教で説明していますが、ライ病の癒しは類型論的には救いの型になっており、ライ病は罪とその結果を比喩的に表しています。イエス様がライ病人を癒された時、ギリシャ語テキストでは、癒しを表すテラペオの代わりに、(健康な組織から病んだ組織を分離して)きよめるという意味のカタリゾーという言葉を使っています。主だけが聖めることがおできになります。混じり合ったものをきよめるために、悪いものを取り除いて良いものを残そうとするのは馬鹿げています。聖いものがこの世との接触で少し汚れてしまったのなら、それを洗うことはできます(ヨハネ13:10~14)。私達が救われた時のことについては、“完全に“という意味のギリシャ語のエプルナンを使って、小羊の血で衣服を洗った(黙示録7:14)と表現しています。私たちには、自分で自分を聖くすることができません。ひとたび混ぜ物となってしまったなら、洗ったり分離したりすることはできません。全部を破棄し、神様に全く新しくしていただくことでしか、価値のない物を価値あるものに作り替えることはできないのです(エレミヤ18:4)。

ですから、牧師たちがローマ・カトリックや自由主義プロテスタントと妥協することを議論し、あるいは金目当てのテレビ説教者やトロント、アルファ、プロミス・キーパーズ、ペンサコーラ、ジム・チャレンジなどを拒絶しないと協議している時、そこには「混ぜ物」があります。私たちは「良いものを守り、悪いものを拒絶」すべきです——私たちは、聖書的に無知で、教会指導者の資格(1テモテ3:2~7、テトス1:9)のない人々を見ているのです。彼らは、神の御言葉を正しく教え、分かちあい、正しい教理を保つことができません。ペンテコステ指導者たちの権威は、教会のいかさま行為のために格上げされ、増大してまいりました。

今日、教会の中の安っぽい預言ミニストリーにおいて頻繁に見られることですが、偽預言者について語る時、「まあ、時には彼の未来預言も合っていることがある」と言われたりします。しかしながら神の御言葉は、このような考え方に対し、明確に力強く、間違いのない警告を与えています(エレミヤ5:30~31)。カンザス・シティの預言者の一人ボブ・ジョーンズ(不品行が発覚した)について、故ジョン・ウィンバーは言いました。「彼は2つの開口部を持つパイプのようなものだ。時には悪魔が彼を通して語り、時には主が語られる」！ウィンバーは、教理的保守派のウェスレヤン・アルミニアン・ペンテコステ運動から追い出された後、超カリスマ的カルビン主義者になった人物で、現代のネオ・グノーシス/ニューエイジの熱狂的カリスマ主義の第一人者です。再建主義というカルビン派の教理的誤りと体験主義神学という誤りを混合し、支配主義というだましごとで導いた彼の革新的契約神学こそ混ぜ物なのです。

聖書的に見分けるなら、神の御言葉は、アルファ・コース、ペンサコーラのようなものに

は“混ぜ物”があるという事実を私たちに警告し、それらは神からのものではないと教えてくれます。教理的誤りという要素が混ぜ物を生じ、最終的にはだましごとという産物を生み出すのです。この混ぜ物の根にあるものは、常に深刻な教理的誤りとの妥協です。そして今度はそこから、真理と誤りの混ぜ物、肉と霊の混ぜ物、神のものとサタンのものとの混ぜ物さえ生み出すのです。

デイヴィッド・ポーソンがトロント現象に対する態度をはっきりさせず、彼を信頼していた人々に明確に指導しなかったため、困惑して私達に連絡してきた多くの人々がいました。「その祝福は聖書的ですか？」というタイトルの本で、ポーソンは「日和見的な態度」を取り、信号は赤でも青でもなく黄色だと言っています。黄色の信号はほんの数秒しか続きません。それは、信号が変わりそうなので、行くか止まるか準備するようにと教えるものです。笑ったり吠えたりする現象が始まってから6年間も黄色のままにいるということはありえません。今では誰もが、リバイバルなど起こらなかったと知っているのです。どれくらい良いものがあり、どれくらい悪いものがあつたかという質問は、問題の核心ではありません。混ぜ物があるという事実により、信号は赤なのです。色盲になった人が他人に指示を出すような立場に立つことは、とてもできないことです。霊的酔っ払いに関して、神の御言葉は、裁きが下される時によるめき、偽りが入口から押し寄せてくる時によるめく人々について、私たちに重ねて警告しています。(イザヤ28:7) 彼らがそのように酔っ払っている理由は、イザヤ28:8に書かれています。“吐く”とは霊的な食べ物を拒絶することです。聖書的に見分け、神の御言葉を基準に明確に発言し、はっきり判断することはしたくないので、心地よく感じられない聖書の真理を受け付けません。ですから、信頼できる聖書教師を期待し求めている人々は、進めとも止まれとも言われません。信号は青でも赤でもなく、黄色のままなのです。

I テサロニケ2:3で「誤り、不純な心、だましごと」という偽りの説教の原動力について述べた後で、パウロは続けて4~6節で、自分自身の働きとシルワノとテモテの働きとを比較し、その根底にある動機を説明しています。混ぜ物に関わる人々は、パウロがギリシャ語でドロと呼び、狡猾さを意味する“だましごと”に陥ります。このことに関わっている人々は、言い換えると実行計画を持っているのです。パウロが言うように、彼らは人を喜ばせるためにへつらいますが、本当の動機は貪欲です。聖霊がパウロを通して私たちに与える警告は、驚くほど正確であることがわかるではありませんか！ 今日教会で見られるだましごとに通ずる特徴は、お金目当てであることに間違いありません。一つだけ例を挙げます。共同通信によると、ペンサコーラでミニストリーのために集められた660万ドルの献金のうち、わずか2%しか使われていないそうです。残りはリーダーたちの贅沢な家や不当な利益になったのです。ペンサコーラは真理に誤りを混ぜ合わせ、そして不純な混ぜ物がだましごとを生み出しましたが、その根底には金欲がありそうです。ペンサコーラのジョン・キルパトリック牧師は、神が3か月後にハンク・ハネグラーフを引き降ろすという偽預言をした後

で、自分自身が屋根から落ちて骨盤を砕き、車いすに縛り付けられ、引き降ろされてしまいました。それでも商売はまだ続きました。パウロが書いたように、混ぜ物の根底には貪欲があるのです。

そのような真理と誤りの混ぜ物は、初めからサタンのトリックでした。サタンは真理に誤りを混ぜてアダムとエバをだまし、神が本当に語られたことを文脈から微妙にゆがめてしまいました。同様に、イエス様を誘惑した物語で、サタンは御言葉を文脈からねじ曲げて使い、誘惑を試みました。このことは、サタンが光の天使に偽装するという性質を反映しています。ですからパウロは、教会を欺くために送られたサタンのしもべも、同じように自分を光の天使にカモフラージュすると警告しているのです（Ⅱコリント 11：3、13～15）。それゆえペテロが警告するように、彼らも同じ様に御言葉を文脈からねじ曲げて使い、自分自身に滅びを招きます（Ⅱペテロ 3：16）。繁荣神学、置換神学、エキュメニズム、レストレーションなどは全て、サタンがしもべどもを使って、御言葉を曲解し、選ばれた者たちに対して仕掛けるだましごとなのです。デイヴィッド・ピッチズ司教、マイク・ビッケル、ジョン・アバンジーニ、ロドニー・ハワード・ブラウンの場合など、曲解があまりに馬鹿ばかしくて、そんながらくたを信じる人がいるのかと驚きますが、にもかかわらず、今日、多くのいわゆるクリスチャンが、不幸なことにそれを信じているのです。

新約聖書では、教理的な真理と誤りを混ぜあわせることを、Ⅱペテロ 2：1で「滅びをもたらす異端をひそかに持ち込む」と説明しており、真理を誤りの隣に置くという意味のギリシャ語、**パラソクソウジン**を使っています。この節によると、そのような人物は偽教師、偽預言者であり、本物のふりをする人と言う意味のギリシャ語**プレフィクスプスエード**が使われています。ペテロは、そのような人々は自分を買って取ってくださった主を否定していると説明しましたが、私たちが目撃しているのがまさにそのことなのです。

ケネス・ヘーゲンとケネス・コーブランドの悪魔的教理によると、イエス様ではなくサタンが十字架で勝利し、イエス様は地獄でサタンと同じ性質になって三日三晩拷問を受けた後、地獄で新生しなければいけなかったそうです。その上コーブランドは、自分もイエス・キリストの代わりに十字架で死ぬことができたとさえ教えています。そのような経緯を通り、最終的には冒流的な異端に行き着くのですが、実に始まりはそんなものです。それは混ぜ物から始まるのです。